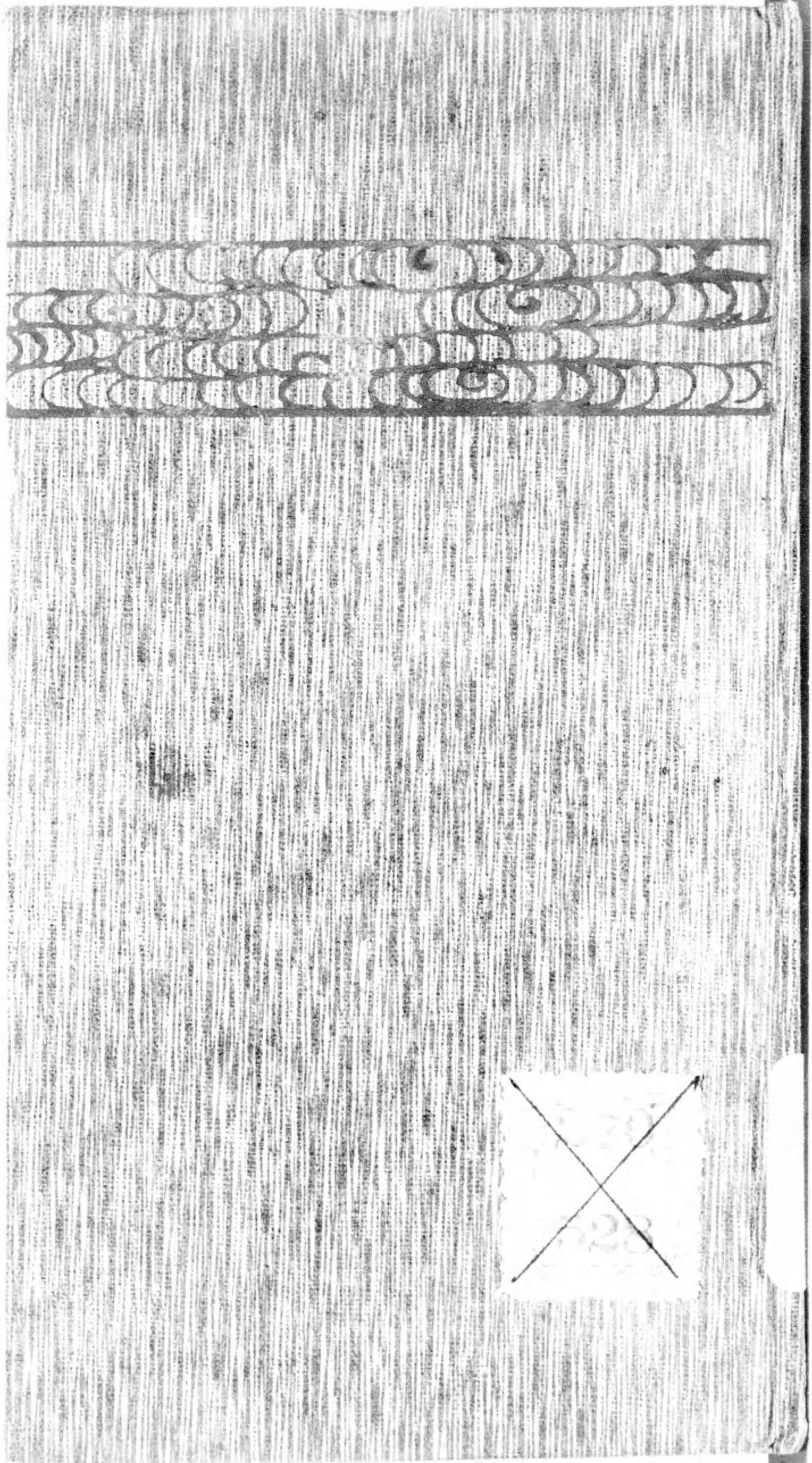


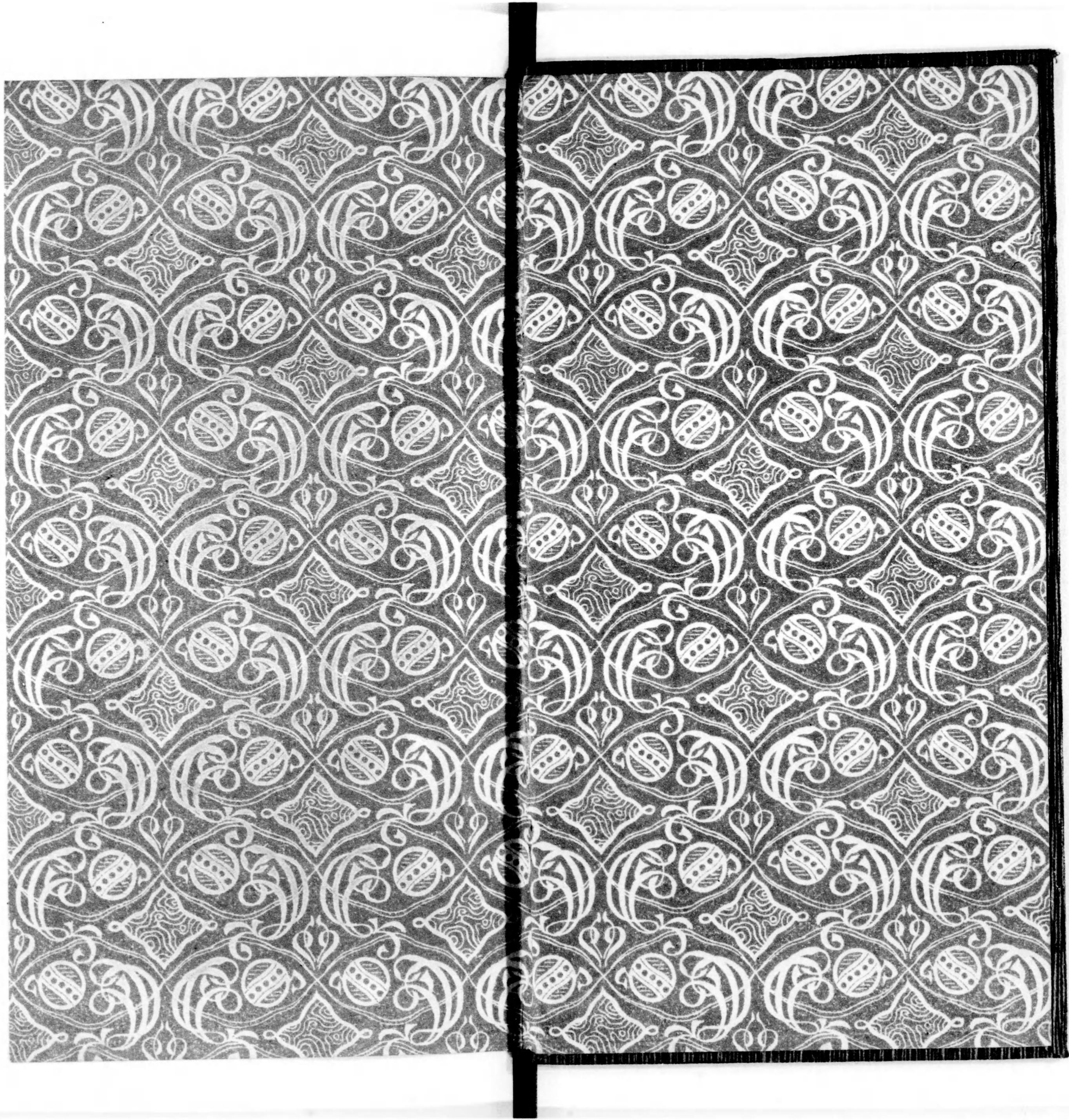


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

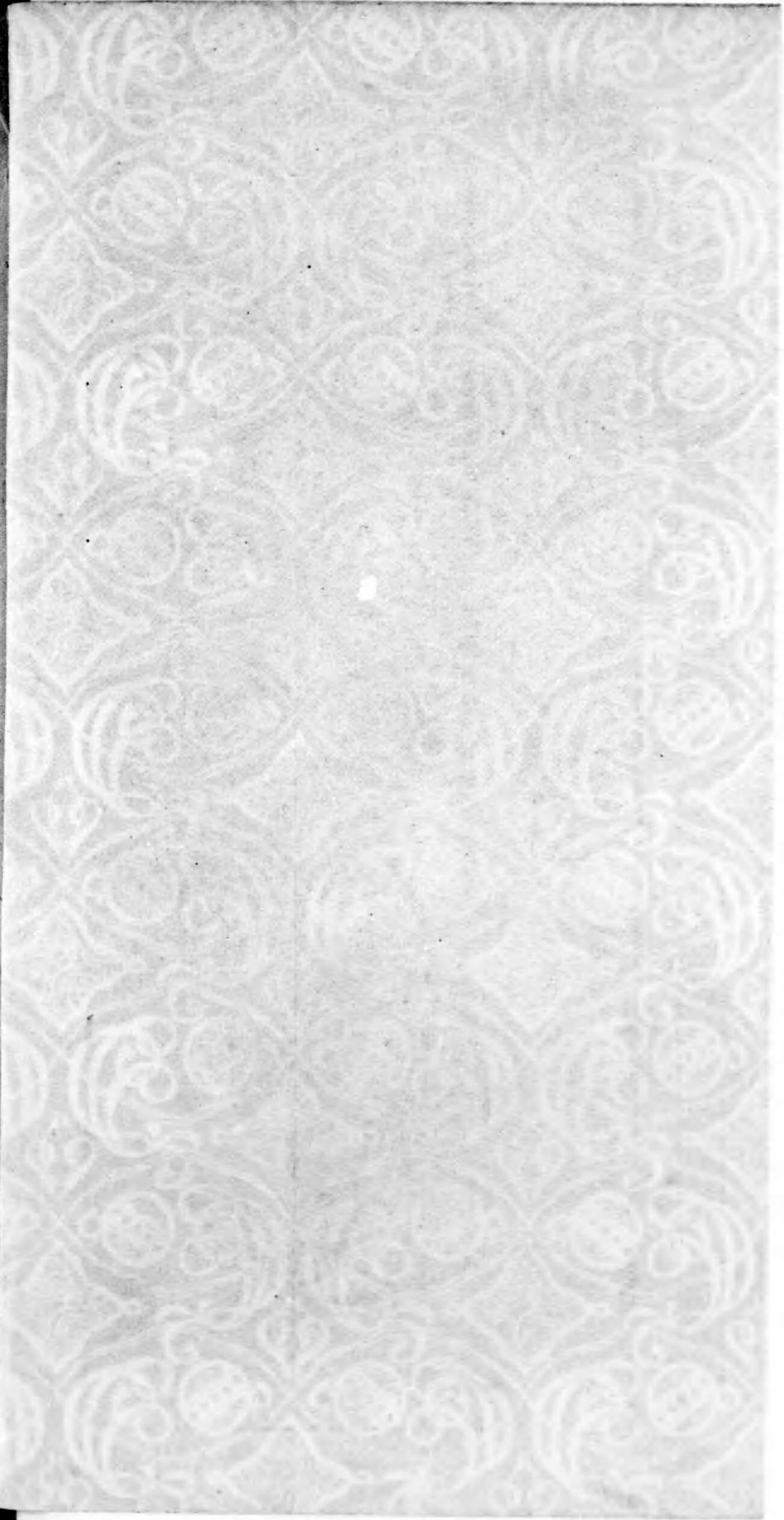
始







特100
426



持100
426

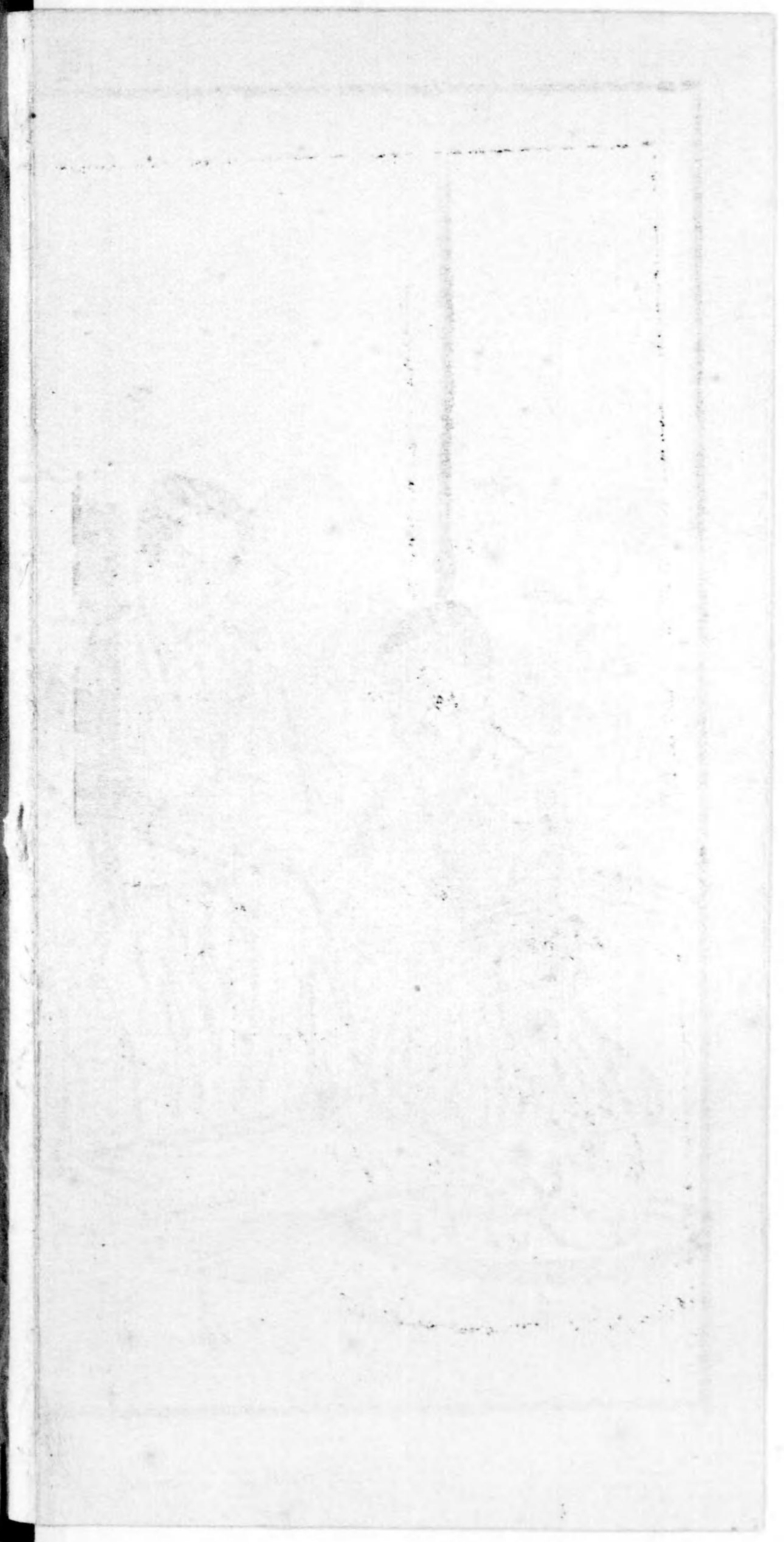


新海君

大正八年六月廿一日



天

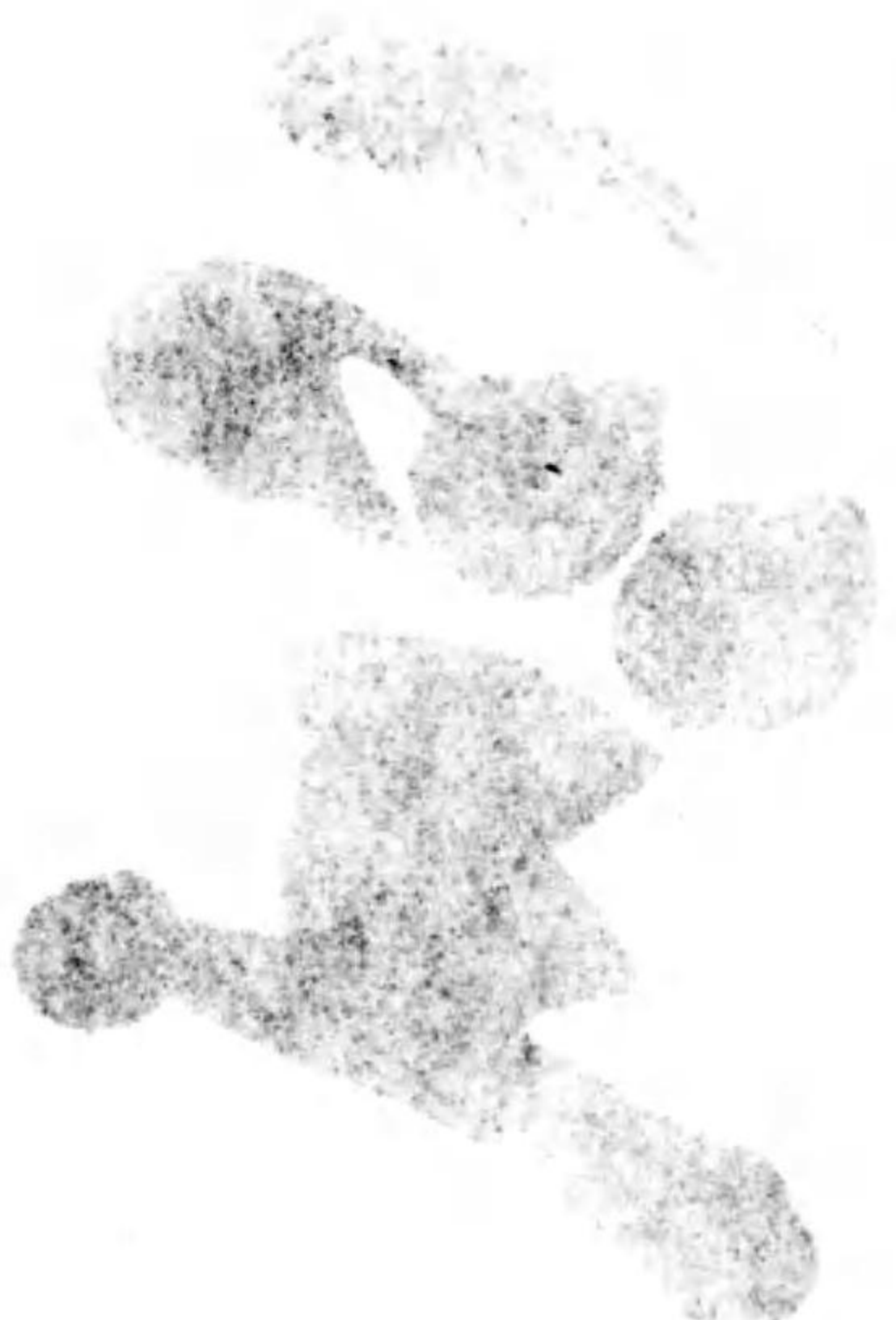


禮新



新洲君之
九十老人
湖山





野人言物智海氏源支如親古は兼海の
 逸事を蒐採し之を著し刊行せんとす
 企て其稿をよし且序を書りらる余は
 如河と名たり親交固より其書ありん
 ち讀んで之を誦すんそ人を研究し其
 人を究らんと欲せし終る正俗のあり
 之を親交せきより其に如河の正俗を
 引せらるるの多し據て其正俗を現に
 呈すも其未だ其俗を究らざる其書
 を恨み偏其稿を呈すも其據らるる



1.11.30.
 内容

大木先生の著書「清談」の状は、
 先生は修養の工夫をこらして、
 清静な心で、
 由るその心海を、
 資料は、
 先生と先生との関係

壬午七月 街和郎 小おて

三井物産 後

緒言

今や能樂の盛なる、諷謠の聲到る所耳にせざるはなき世となれり。従ひて能又は謠に關する書の公にせらるゝもの頗る多しと雖も、名流巨擘の傳記逸事等に至りては寔に鮮し。曩に齋藤香村子「清廉遺風」を著すあり、之れ先生の略傳として見る可きもの、更に先生が他の半面に於ても傳ふ可きもの多々あり。予多年先生の教へを受け、久しく先生の風貌に親しみし故を以て先生の爲人を知る。乃ち先生の平常逸事等を蒐録して竟に斯の

一書を爲すに至れり。然れ共猶ほ足はぬ所多きを知る。只夫れ斯の一偉才が面影の一端を窺知せしめ得べくんば即ち幸甚なり矣。

大正元年十月

著者しるす

目次

観世家……………一

舊幕時代の観世家——観世屋敷——観世太夫の木賊刈——観世太夫の義経袴——観世水の由来——観世黒雪と清興——観世豆腐——観世の稻荷祭

清廉先生の爲人……………三五

萬卒を統御すべき器——極めて平民的人——観世の大久保彦左——謡曲の式で葬ひ——人を見るの明——士氣を鼓舞す——廢兵を搞ふ——勝利を未然に祝す——先生の短所——斯道の爲には險をも冒す——催眠術の研究——稀に見るの孝子——意表外の稽古

始め—終世の恨事—誤解されたる先生

清廉先生の藝談

七五

諸の儀式を遵守せよ—謠ふ時の姿勢—九階級の調子—觀世流の謠ひ方—息繼の要訣—能面と表情

觀世家

舊幕時代の觀世家

御能役者

新寶曆武鑑

御役人衆卷ノ三



大夫 二百五十石

觀世左近

京橋南二町目

太夫

觀世織部

尾張町
左近子

觀世三十郎

左近子

觀世鬼治郎

ワキ

進藤久右衛門

ワキ

福王茂左衛門

八丁堀

ワキ
八丁堀

福王茂十郎

ワキ

進藤平右衛門

ツレ

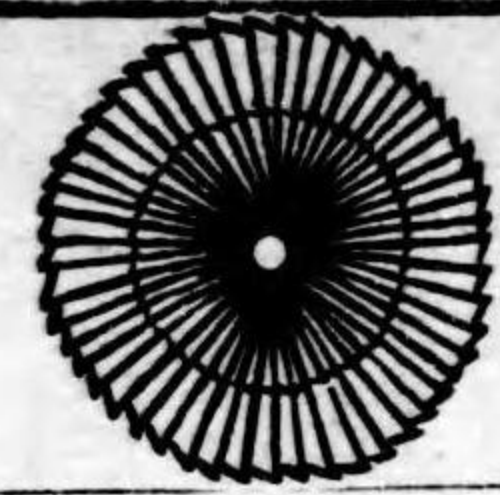
梅若 六郎

觀世屋敷 觀世藤十郎	菅柳原久右衛門町 春日又三郎	小ッ、ミ 芝新錢座 觀世權九郎	小ッ、ミ はまた 幸久治郎	大ッ、ミ 本所 梅若孫七	大ッ、ミ 本所 高井儀助	大太鼓 本所 梅若治右衛門
ツレ かやべ丁 日吉猪右衛門	菅 本八丁堀 森田長藏	大ッ、ミ つきじ 葛野市郎兵衛	大ッ、ミ つぎじ 福王清兵衛	大太鼓 中橋 觀世左吉	大太鼓 兩かへ丁 觀世長六	大太鼓 丁白銀目 多田傳七
ツレ 淺草 彌石又治郎	小ッ、ミ 芝新錢座 觀世新九郎	大ッ、ミ はまた 幸清次郎	大ッ、ミ 赤坂 樋口源治郎	大太鼓 うた川丁 觀世權八	大太鼓 南八丁堀 岡村茂左衛門	大太鼓 丁白銀目 多田太郎吉

狂言 南八丁堀 鷺 仁右衛門	狂言 下谷 矢田半四郎	同 木挽丁 名女川辰三郎	地 ほりね丁 山本半五郎	地 いなげ丁 福王長五郎	同 八丁堀り 日吉五郎右衛門	同 八丁堀り 日吉太兵衛
狂言 木挽丁 鷺 傳右衛門	狂言 南八丁堀 日吉長六	地 本所 山階彌七	地 本所 服部龜之助	同 ほりね丁 山本又次郎	同 おわり丁 日吉次郎三郎	同 日吉新藏
狂言 木挽丁 鷺 勘次郎	同 南八丁堀 岡村茂左衛門	地 ヤリヤ丁 日吉十五郎	同 いなげ丁 福王甚五兵衛	同 同朋丁 日吉助次郎	同 中はし 日吉源次郎	同 淺草 梅若吉之丞

若御能役者

安政三丙辰年改武鑑の寫
御書物師出雲寺萬次郎藏板



三十郎
二百五十六石
觀世太夫

京橋南二丁目弓丁

五十石
同居
觀世太郎

進藤權之助
福王丑之進
進藤榮太郎

本銀丁三梅若六之亟
下谷大番春日市右衛門

湯島三組森田初太郎

小ッ、ミ
芝新錢座
觀世新三郎

下谷中御幸
清次郎

清次郎倅
幸政次郎

大ッ、ミ
下谷中御葛野九郎兵衛

九郎兵衛
葛野市郎兵衛

三田ひぢ
樋口久右衛門

大ッ、ミ
芝森元町
清水助五郎

下谷長者高井
兵助

兵助倅
高井兵右衛門

清兵衛倅
福王安次郎

太鼓
觀世與五郎

太鼓
繩場丁大觀世鑄作

太鼓
繩場丁大田
傳次郎

狂言
鷺仁右衛門

狂言
田佐久町
鷺傳右衛門

地
はま丁矢日吉金三郎

地
北八丁堀
日吉五郎右衛門

地
下谷茅丁
日吉熊次郎

地
下谷山ふ日吉太兵衛

地
住吉丁
日吉猪八郎

弓丁
日吉甚三郎

竹田傳藏

日吉貞之亟

觀世屋敷

京都大宮通り今出川上る所に花園小學校と云ふのがある。
此邊一圓こそ、觀世二代の祖として名高い彼の世阿彌即ち元清
が足利義滿公から拜領した地なのである。無論其の當時は此
所に立派な屋敷があつたに相違ない、何しろ坪敷はザツと千三
百坪もあつたと云ふ位なものだ。然るに足利氏滅び、戰國を經
て世は徳川のものとなつてから觀世太夫は江戸の京橋弓町に

屋敷を拜領して此所に住む事となつた之れは誰れも知つてゐ
る處である。爾來綿々として清孝の代となつた。恰も世は維
新の騒ぎで能樂どころの沙汰では無い。將軍慶喜公は駿府今
の静岡へ退くと云ふので、清孝も扈從し暫く同地に留まつてゐ
た。さて一方京都の屋敷は徳川の世となつてから火災に會つ
て、全部焼盡した事もあつたが維新際まで弟子共が維持して來
た。時偶封建制が撤廢せらるゝ事となつたので安閑としても
居られず、早速京都在住の能役達が寄り合つて凝議し、反上した

ものか何うか、兎に角左の届書だけを其筋へ差出す事とした。

御 届 書

大宮通り今出川上ル町

觀世太夫屋敷

當屋敷は應永年中足利將軍義滿公より拜領仕候後將軍家御代々京都に住居罷在り候處元和年中より江戸表に屋敷出來仕り年々同地に罷出御暇被下候節は罷歸り居り候然るに京都西陣の大火並に享保十五年大火の節建物残らず焼失仕候に付其再建迄の間太夫は歸京不仕候乍去弟子共預りて固く留守仕り終に今日迄四百七十餘年所持致し來り候ものに候得共御時節柄に付御届出仕候 以上

觀世太夫名代

- 片山 九郎三郎 印
- 菌 久右衛門 印
- 林 喜 十 郎 印
- 岩井茂之丞 印
- 大西 寸 松 印

慶應四辰年三月

京 都 御 裁 所

右連名の五人は何れも關西の能役である。其中片山九郎三郎は今の九郎三郎の養父で、其頃大津邊に浮浪してゐたのを見

附け出して来たのだ。岩井茂之丞と云ふのはまだ子供であつたし、大西寸松は大西閑雪の親だが大阪に居つたものだから、林喜十郎(後に喜右衛門)と蘭久右衛門との二人が届書を持って出頭したのである。すると京都御裁所では届書を受理した上委細は承知した、追つて沙汰に及ぶとの挨拶があつて二人は引き下つて来た。

さて其後間も無く沙汰があつて、千三百坪の觀世屋敷は其の半分を政府へ納める事となり、残り半分は賣つて了つた。而し

て跡には上京八組小學校建築地と云ふ標札が立てられた。然るに茲に怪しからぬは、屋敷の半分を賣つて了つた金を届書に連署した五人の中の某一人が着服して了つた事である。此着服した男は罪人になる可き處だつたのを、林喜右衛門の盡力で辛つと逃れたのである。喜右衛門は正直な人だつたから、自己の疑はるゝを虞れて當時の一件書類だけはちやんと保存して置いたさうだ。清廉先生の母堂は此の着服した詐欺漢の事を聞き、齒齧をして口惜しがられたさうだが、其の男は間もなく血

を吐いて死んで了つたと云ふ事だ。

之れが観世屋敷始終の概略である。

観世太夫の木賊刈

昔の大夫が藝の研究に熱心であつた事は眞に驚嘆に値すべきである。今茲に観世太夫が「木賊」の能に就いて如何に精密な注意を拂つた乎と云ふ事を證して餘りある一佳話を掲げやう之れは「雨窓閑話」と云ふ本の巻の中に載せてあるものである。

観世一代能の事並木賊刈の事

享保年中観世太夫一世一代の観進能を行ひ、京都の河原に舞臺を造り機敷を拵へ芝居を興行す。見るものは蟻の如く群集せり。初日か二日目に観世木賊刈を舞ふ。其面白事見るもの感に堪たり。こゝに如何にも田舎めきたる百姓と覺しきもの十人計連立て能を見物して有けるが、數千人の人數悉く讚歎する中に、彼百姓共はさも思はぬやらん何かひそ／＼呷合てうけず顔成けるを、観世舞ながら此體をきつと見とがめ、扱能も終れば木月へ人を遣はし、かく／＼したる衣類着たる百姓十人計木月を通らん時必留置申すべし、尋ぬる仔細有といひやりければ程なく能濟みて木月

を出でんとする時、彼の百姓共を差留けるゆゑ、何事かはと大に驚
きしを、觀世さばがぬやうに樂屋へ呼て申けるは、今日我等木賊刈
を舞其出來たる事凡そあるまじく思ふ心にて仕たりしかば、果し
て貴賤群集おしなべて感心の様子に見えたるが中に、其方共は、さ
もおもはぬ様子にて何やらん打ひそみて、咄合たるはいかにや、其
さまふしぎに思ふによつて、仔細を尋度木戸にて留させしなりと
申ければ、百姓共申は、我等事は信州のその原と申所の土民に候。
今日木賊刈の能興行あるよし承及び、我等も木賊刈るもの共なれ
ば、なぐさみながら能とやらんを見物して、一生の噺の種にもせま

ほしく思ひて今朝より芝居して見物する處、心なき賤の我々ども
感心して面白く侍る。さりながら只今遊されたるうち、いで〜
とくさからふよと申所鎌の御手我等が仕なれたるとは、聊か替り
ある故申事にて候といへば、觀世の曰それはいと〜面白き見告
やうなり。いかにしてか汝等ばかり尋ねれば、さればとく
さは向へ一刀切にかり申候に、今遊されたるを拜見いたし候へば
同じ所を前の方へ二刀にて御かりなされ候を見申て候。あれに
てはとくさはかられ申まじく候と云ければ、觀世大に感心して物
とらせつ、厚賞して戻しぬ。その後觀世江戸にてとくさ刈をせし

時、先年信州の百姓等が批判せしをまもり、向の方へとくさを刈ければ、其能の出来たる事大方ならず。みな目を驚すに至れりとぞ。某の人曰く、智しやにも一失有り愚しやにも必一得あり、其道に入らず、其道を知る。信州その原はとくさの名所にて、かの百姓等數年その木賊を刈て手練し居る事なれば、觀世に鎌のての違ひたりと申ける事尤殊勝なり。觀世も舞臺の上にて自餘の人々には目もかけまじき所、あやしの百姓等が叫あふをきつと見告めしこそ、流石名人なれ。そののみならず、樂屋まで呼入れて底意なく尋問せし事、其己か業の道を求める端にしていはん方なし。

世の人藝術に凝執心し、其藝の奥義を得或は妙所に至る。皆道執心たるが故なり。されども藝術に執心する人は多けれども人の人たる道に執心する人は稀なり。觀世が百姓にとくさの鎌の手を聞たるが如く、賤の男賤の女たりとも、其道を聞かん時には妙所に至る事あるべし。おるそかに思ふべがらすとなり

觀世太夫の義經袴

昔し觀世太夫の勢力と云ふものは實に素晴しかつたもので、能役の首座と仰がれ、將軍の御指南役と尊はれ、宛然大名に異ら

なかつた。斯程の觀世太夫も時世時節には詮なく、維新の際には扶持離れとなり、昨日に變る身となつたが、それでも其當座は矢張り威張りに威張つたものださうだ。其の一端を窺ふに足るものは維新後清孝の京入りで、之れがまた頗る豪勢なものだつたさうだ。

清孝が維新後になつて始めて京都へ來たのは明治二年七月七日の晩だつた。いよ／＼京都へ入ると云ふ前に家元附の清彌三郎と日吉邦太郎との兩人が先驅を承はつて、息せき切つて

駆け込み、今直に後から家元が御着になるからお出迎ひ／＼と御注進に及ぶ。畏つたとあつて林喜右衛門、淺井喜太郎、片山九郎右衛門の弟子、大西寸松、大西閑雪の親と云ふ面々が一樣に麻上下を着けて、急ぎ三條の蹴上げまで御出迎ひとある。ところが幾ら待つても夫れらしいものゝ影だに見えないので、此方は氣が氣で無く、徒歩で山科あたりまで延すと、果して向ふから切り棒の兩昇の駕籠で悠々とやつて來た。見ると家元の則には曩きに御注進に飛んで來た清彌三郎、日吉邦太郎、兩人の外に今

一人梅若富太郎が付き添ひ、家元の奥方と清廉先生までが後に
従ひ、下男の仁助と云ふのが、觀世三十郎と書いた札の着いてゐ
る長棒を擔いでゐる。それから三條蹴上げまで来て先づは、恙
なく南側の弓屋と云ふ宿屋に着いた。

さて始めて駕籠から出た處の觀世太夫の扮装を見てあれば
黒の三ツ葵の紋附に義經袴を穿き、立派な太刀を差し、其の威儀
實にも堂々たるもので、駕籠を出るなり直ぐ奥へ通つて了つた
ものだ。先づ林喜右衛門が挨拶に出ると御苦勞であつた」とば

かり、太夫は濟し返つて御座る。良あつて「菌久右衛門は如何致
した。何故迎に出ぬぞ」との仰せ、久右衛門は今日據處無い所の
諸講で御出迎ひに參られませんか、御座りました」と喜右衛門
がお答へに及ぶと、太夫は氣色を變へ「怪しからん奴ぢや」と苦り
切つてゐたさうだ。此時片山の先代は何か事情があつたと見
えて會はなかつたと云ふ話だ。それから喜右衛門は清孝に向
ひ「大西寸松と申すものが遙々大阪から御出迎ひに參つて居り
まするし、片山の弟子なる淺井喜太郎と申すものも同じく御出

迎ひに參つて居りますから、何卒お目通りの程をお願い致します。ますると云ふと、清孝は頑として大西とは何だ。乃公はそんなものは知らぬ。同列の外目通り叶はぬと左様申せと肯き容れないので、喜右衛門は中に這入つてホト／＼弱つたが種々云ひなして辛との事でお目通りを許されたさうだ。尤も此時分の大西は鬚などは無く大坊主だったので聊か具合が悪かつたさうだ。又清孝の言葉のうちに同列とあるのは畢竟觀世太夫の直弟子と云つたやうなものだとの事だ。

弓屋を出てからは大手を振つて三條通りを濶歩したさうだが流石に義經袴だけは脱いでゐたさうだ。そして大宮御池下の若狭屋八兵衛と云ふ宿屋に泊つて羽振りを利用したものださうで今に一ツ話に残つてゐる。

觀世水の由來

京都今出川の觀世屋敷のうちに名水があつた。是れが即ち觀世水なので、最も深い底の方では常に渦を巻いてゐたと云ふ事だ。之れから採つて模様の觀世水にも渦を作してゐると見

える。それで昔は此水に依つて諸病が癒へると傳へて人々禮拜して汲み上げたものださうだ。今は花園小學校の中に確乎蓋してある。兎に角得易からぬ名水であつたと云ふ事が解る

觀世黒雪と清興

觀世九代の宗家に左近太夫忠親と云ふ人があつた。此人黒雪と號して、品川東海寺の住職彼の澤庵和尚と交りが深かつた。黒雪或時乾坤踏破到梵天。諸佛諸菩薩殺盡始得安」と云ふ句を認めて使に持たせて澤庵の許へ遣はしたが、其の使のものがま

だ歸つて來ないうちに再び左の詠歌を贈つた。

わがやどは風を籬に露しきて

月にうたへる瓢箪の聲

さて此の歌で思ひ當るのは觀世の謠曲見臺には必ず月と瓢の形が彫つてある事だ。

又十九代の宗家國樂長泰清興と云ふ人も文事に秀でゝゐた其の詠詩の一を擧げると、

邯鄲旅客榮華枕 江口美人歌舞舟

如是觀家眞秘曲 六輪々轉々風流

辭世の句は、

秋の夜や軒もる月の白鳥

觀世豆腐

宗家で毎年十二月に催す納會には豫定の番組を謠ひ終へてから後は、晚餐の饗應となるのが例となつてゐる。扱て其の膳部は素より他へ申附けるのであるが、たつた一品だけは宗家の厨で拵へるのである。之れが即ち觀世豆腐の椀盛で、之ればか

りは宗家傳來の手料理なのであるから、容易に他の模倣を許さぬ。謠並みに口傳的の調理と申上げたなら宜からう。一ト口スルくと戴くと、先づ以て風味の極めて清佳なのに舌躍り、扱て其の古雅の韻致は津々として盡くる處を知らぬのである。

此の席に列るものは云ふまでも無く宗家の教授を受けた新古の門人五六十人ばかりで、食膳に着くと内弟子の人々は酌に出で、大いに幹旋に努めるのである。興酣ともなれば先生の獨吟もあり、仕舞もあり、我々門人共の聯吟もあり、主客、否、師弟互ひ

に隔てなく、打ち解けて充分の歡を貪り、和氣洋々の裡に年を送るので、一種云ふ可らざる快感に打たれるのである。

觀世の稻荷祭

觀世宗家の舞臺へ入つた人は丁度地裏の隅の方に納め手拭のひらめいてゐる小かな祠の在るのを見たであらう。是れこそ觀世家が代々厚く信仰し來つたお稻荷様なのである。餘程古い由緒の有るもので、靈驗も著しいさうだ。處で毎年二月と云ふと、此舞臺で此のお稻荷様のお祭が營まれる。そして献納

の餘興とし亂能を催すのが常となつてゐる。此亂能には先生始め直門の人々は悉く狂言方若しくは囃子方を勤め、狂言師或は囃子方は何れもシテ方を勤めて、藝の交換をするのであるから其の滑稽さは無類で、眞に抱腹絶倒の極なのである。此日觀世會員は勿論、宗家出入の人々、婦人子供等の來觀多く、鮎、蕎麥、餅、赤飯、麥酒、正宗、甘酒などの御馳走に、下戸も上戸も無遠慮の樂しみは、江戸川の流れ盡させぬ宗家繁榮の極まる處を知らざる熾ん、盛りなのである。

一説に依れば觀世宗家が徳川將軍の召抱となつて江戸に下つた時此の稻荷が一夜のうちに一足飛びに京都から江戸の觀世の邸へ飛んで來たので、一足様と唱へ來つたと云ふてゐる。

清廉先生の爲人

萬卒を統御すべき器

先生は觀世清孝の長男に生れ、幼少の頃父を喪はれた。先生には二人の弟が有る。即ち次なるは觀世鐘次氏、其の次なるは片山九郎三郎氏である。兄弟三人の中で、躰軀に於ては先生が最も小さかつたが、人物に於ては先生が最も大きかつた。先生の一舉一動は飽くまでも鷹揚で、野卑陋劣な點は藥にしたくも

無く、眞まことに之これれ凡俗ほんぞくに超こえてゐた。殊ことに金錢きんせんにかけては頗すこぶる綺きら麗いなもので、毫ちひさもこせついたところが無なかつた。それだから人ひと皆みな先生せんせいを長老ちやうらうと尊たうとんでゐたのも怪あやしむに足たらない。先生せんせいはまた能よく門下もんかを劬いたはり、孜し々々として後進こうしんの引ひき立てに努つとめられた。先生せんせいが徳望とくぼうの高たかかつたのは主しゆとして此こゝに因由いんゆうしてゐるのである。若もし夫れ軍人ぐんじんに例たとへんか、先生せんせいは決して兵卒へいそつとして他ひとに引ひき廻まはされる人ひとでは無ない。必かならずや萬卒ばんそつを統御とうごすべき器量きりやうを有もつた人ひとだつたのである。

極めて平民的の人

觀世くわんせいは代々よよ徳川家とくがわけの御指南役ごしなんやくで、別項武鑑べつかうぶかんの寫うつしにも見みゆる如ごとく、天下てんかの御旗本ごはたもとと同列どうれつ御直參ごぢきさんの地位ちゐに在あつた。今日こんにちの官職くわんしやくで云いへば侍講じこウ若もしくは侍讀じとくに相當さうたうするものである。されば將軍しやうぐんを首はめ重おもい役人やくにんまで悉こまく之これれ觀世くわんせい太夫たいふの門人もんにんであつたから其頃そのころに在あつては無上むじやうの名譽めいよとし、他たの遊藝人いうげいじんと同どう一視いつしせられず權勢けんせい實じつに四邊あたりを拂はふばかりであつた。然しかしながら先生せんせいの生うまれた時分じぶんには最早もはやや幕府ばくふは無なかつた。只ただ父母ふぼの膝ひざに凭たれて殿中でんちゆう

に時めいた其のかみの有様を語り聞かせられ。幼き心に其の
面影を描くのみであつた。さう云ふ處からして段々に平民的
の慣習が醸生せらるゝやうになつた。とは云へ、先生は元來
腰の低い、才子肌の人で、極々氣輕な質であつた。之れは洵
に結構な事には相違ないが、時と場合に依つては今少し重々
しくされても宜からうにと思はしめた事もあつた。

觀世の大久保彦左

觀世宗家の門人に市川某と稱する白髮霜髯の老翁があつた

斯の翁は清孝から引續き先生にも就いて教へを受け、觀世家
の事は何くれとなく世話をしてゐた。ところで先生は時折り
宿酔の爲に、稽古人が一杯座席に詰めかけて待つて居ても容
易に起きて來ない事があつた。斯様な時と云ふと市川老人見
かねて遠慮會釋もあらばこそ、ズカ／＼と先生の枕許へ怒鳴
り込んで行く。すると先生は此老人ばかりには文句も云はず
直ぐに起き出て嗽ひ手水もソコ／＼朝餉を了はるなり例の如
く座に着いて稽古を始める。それだから門下何れも此老人を

徳とし、先生の起き方が少し遅いと市川さん、また頼む！」

謡曲の式で葬ひ

小網町邊に雨道具を商ふ問屋の主人で、吉澤翁翁と云ふ觀世三代の門人があつた。此の老人が歿するに臨んで「私の死んだ後は佛葬もして貰ひ度くなければ又神葬もして貰ひ度くない觀世宗家に願つて謡曲の式で葬ひをして呉れ」と遺言して死んだ。遺族も之れには當惑したが、兎に角其の由を先生に願ひして見ると、先生は怒るかと思ひの外、快く承諾され、遺言通り謡

曲の式で葬儀を執り行はれた。先生が先輩及び長老を重せられた事は、先の市川老人に就いて、又此老人に就いて充分に窺ひ得られた事と思ふ。

人を見るの明

先生の門人に森川秀雄と云ふ老人があつた。此の老人、一寸見ると如何にも武骨で、お世辭一つ云ふぢやアなし、味も鹽ツばかりも無い人だつた。然るに先生は此の老人を太く信愛し、今日の新小川町舞臺新築に就いて夫れ々々委員を置いた際の如き

も、此の老人を委員の一人に擧げた。數多い委員の中でも此の老人は取りわけ刻苦精勵、第一に出納が如何にも明瞭で、寄附をするものも餘程出來、豫定通り落成の功を奏した。余は常に思うて居る、森川翁の如きは所謂言に訥にして行に敏なる着實家として大いに稱揚するに足るべきであるが、同時に又之れを見抜いた先生が離婁の明は推服措く處を知らぬ。

士氣を鼓舞す

門弟は勿論他人でも不幸や困窮に陥つてゐる人に對しては

身を忘れて出來得る限りの救済に努めた程、義侠心に富んでゐた先生であつたから、彼の日露戰役の當時出征軍人の爲に屢々宗家の第宅を徵發せられた際の如きも、先生は出征の士を大いに優待し、能ふだけの満足を計られた。而して出發と云ふ時には自ら首途の小謠を作つて自ら吟じ、以て士氣を熾んに鼓舞されるのが常であつた。茲に二月廿四日出陣の際、連吟された先生自作の小謠を掲げやう

ツヨク我忠勇のますら雄が軍のかどでと聞きしより、いさみよ
ろこびしうげんを、謠ふ萬歳めでたくも凱旋まつぞうれしけ
れ、露國のかたきをみな討ちて、四方の國までなびかせん、あら
うれしよろこばし、君萬歳といのるなり、く。

癩兵を癒ふ

先生はまた慈仁の心深く、其筋の許可を得て癩病院に在る癩
兵の悒鬱を慰むる爲め、自身門人を率ひ、同院に到つて或は謠ひ
或は舞ひ、不幸なる戰士をして深く銘感せしめた事も幾度かあ

つた。

勝利を未然に祝す

明治三十七八年日露の戦起るや、畏くも 主上にはいたく宸
襟を御惱せありたる由に承り、下萬民互に戒しめて相愼み、従つ
て歌舞音曲の如きも鳴りを潜め、わけても能や謠は上流人士の
嗜みと稱せられてゐるだけあつて、全く打ち絶えて了つた。此
の時先生は池内信嘉氏と共に「驚」と稱する半能を作り、我國の勝
利を未前に祝さんと、觀世舞臺及び横濱伊勢山の舞臺で自ら演

せられたが、兩所共未曾有の大入りで、是れから後、謠曲の聲も
ポツ／＼聞えるやうになつて來た。先生が愛國の念に富んで
居られたのは、之ればかりで無い。當時又非常な苦心と勞力と
を以て四方に奔走し、能を催して其の揚り高を、悉く軍資に献
納せられた如きは、其の誠忠の深甚なるを證して餘りあるであ
らう。

新作 鷺 中能

池内信嘉作
觀世清廉

ワキ詞是は清國鳳凰城の傍に住むものにて候。さても此程長

白山の方に當つて。一むらの靈氣立ちのぼる由申すもの、
候間。只今登山仕て候。さる程に日も暮れて候處に。あま
りの吹雪にて前後を忘れて候へば。此山陰に一夜を明かさ
ばやと思ひ候。上歌ツヨク雪折の竹の下葉を敷妙の。く。枕
も氷る夜もすがら。寢られぬまゝに思ひやる。浮世のさま
ぞ。かなしきく。地不思議や虚空に音樂響き。あらはれ
出づる乙女の姿。光も四方に満ちくたり。天女上出羽抑も是
は。長白山の池の邊に住て。我清朝の太祖の皇帝。愛親覺

羅の母といはれし。佛庫倫女とは。我事なり。地そのかみ
鵲飛び來り。く。さづけおきたる。天の木の實を。捧げ
つゝ舞ひ遊ぶ。袂も花のにはひかな。中ノ舞地糸竹のしら
べ。聲すみて。く。夜遊も半と見えつるに。俄に北方の
空かきくらかつて。勢するどくおろしつる鷺の羽風。山河
草木動揺して。雷よりもすすまじや。ワシ如何にやいかに
天乙女。海をも掩ふ我が翼を。猶も伸ばさん望みあり。不
老不死の靈藥となる。神變奇特の其木の實。半ばをさきて

あとふべし。天女いやかなふまじ天神の。われに授けし此
木の實。いかで人手に渡すべきと。袖に色見て立のけば。
ワシなほうは、んと追ひかへる。天女かなたは荒鷺。ワシこ
なたは乙女。天女危く見えたる。ワシ折からに。地引くや弓弦
の音たかく。く。矢頭をはかりて兵と射る。いられてた
じろく鷺の姿。力もぬけてぞ。見えたりける。後シテ。早笛。我は
是。豊あし原の國に住んで。武を守り正義を司る。神なり
地君をまもりの劔太刀。働く。抜けば玉ちる秋の霜、とり

なほしさしかざし。向ふ及先にあら驚は。又おきあがりか
りけるを。打ち拂ひ給へば飛びかけり。天に羽うち地に
又たふれ。ひるむと見えしが。旅順の港にせのふせて。た
のむ翼をきりおとし。満洲の野より追ひ拂ひ。すたゝに
きりはふり。東洋の平和を取りかへし。我日の本の君のみ
いつを。四海の外にかゝやかし。勝ときあぐると見えつる
か。明けゆく空の朝日かげ。く。雪の上にぞのぼりける
右の曲が観世舞臺で演せられたのは明治三十七年三月廿一

日で、此謠本は特等の席にゐた人だけに呈したものである。當
日の観覧料は特別一席金五圓、一等金四圓、二等金三圓、而して其
役割は

鷺 観世 清廉 ツレ 橋岡 久太郎 加藤 八百作 観世 元規
加藤 景信 幸 熊次郎 三木 如月

猶ほ同年の勅題巖上松で、先生の作られた小謠にも戦捷の豫
期が満ちゝてゐる。

勅題 巖上松

ツヨク君が代は。千代に八千代に動きなき。く。巖に生ふる

老松の幾年ふるも色かへぬ。縁とゝもに末廣く。天津みそらに
つらなりて。四方の嵐を治むらん。く。

先生の短所

先生は既に世人の知る如く、極めて圓滿なる交際家であつた。誰れに對しても感情を害するやうな事をされなかつた。此點から觀て先生は實に八方美人の隨一とも云へる。然し一利一害は免れぬ數で、先生に於ても、安受合ひと云ふ一弊が有つた。先生程の人であるから諸所八方から出席を請ふもの頻々とし

て其の數を知らぬ。だから屹度出席の出來る所へのみ約束せられて置けば安全であるのに、先生の持ち前としてそれが出來ず、殆んど片ツ端から承諾せられた。先生とても躰軀はたつた一ツしか有つて居られなかつたのであるから、さう承諾先さへ悉く出席するわけには行かぬ。結果違約と云ふ事になる。甚しきに至つては清廉は詐欺家だなど、心にも無い惡評を立てたものもあつた。で、違約された先方は烈火の如くに怒り返つて、今度會つたら思ふ様とツちめ恥をかゝせてやらうと、鬼の様

な顔をして力んでゐる處へ先生が一度例の愛嬌澤山の顔を出して「いや昨日は何共申譯が無い。お許しを願ふ」と、たつた一言云ふと、今までの氣色ドコへやら、一も二も無く打ち解けて、もつゝ通りになつて了ふが例であつた。先生は其の際決して言ひ譯がましい事を述べられた事がない。短所と云へば短所だが、然しまた斯程の人徳は先生に於て始めて有し得る處であらう。

斯道の爲には險をも冒す

余は農商務省の御用を承つて三年ばかり韓國京城に留まつてゐた。丁度明治三十八年五月二十五日京釜鐵道開通の盛典が行はれ、同鐵道總裁古市公威氏等の非常な幹旋で南山の半腹に舞臺を新築し、開通式の餘興として能を催す事となつた。それで同氏は素人とは云へ觀世流の堪能家ではあるし、先生の盛名は既に韓皇室に於ても御承知の事でもあるし、先生は同氏からの懇囑に黙し難く、遂に意を決して門下並びに囃子方數十名を率ひ渡韓して、同胞歡迎の裡に京城に着き、三日間得

意の技藝を演せられた。當時日本からは 陛下の御代理として伏見博恭親王殿下が韓皇族今の李王殿下と御一緒に御台覽あり、猶ほ兩國の大臣、各國の公使以下日韓士民雲集來觀して喝采湧くが如く好評を博して途中釜山でも一日能を催した。處が、時恰も日露戦争に際し、殺氣漲満してゐた折から、對馬海峽の戦機迫り頗る危険を傳へられたので、先生一行は爲に往復共非常警戒線内へ留置せらるゝなど、途中の危害と困難とは恟々たるものがあつた。然しながら先生は斯道の爲には何んな危険

に遭遇しやうと毫も恐る可きで無いと云ふ意氣を以て萬難を冒し、竟に空前の壯舉を果されたのである。之れ嘗に觀世一流のみならず、斯界全般の名譽として永く記憶すべきであらう。先生の渡韓は實に千載一遇の好機であるから、韓宮中に於ても先生並びに一行を召して能を演ぜしめ、御覽遊ばさるゝやう其筋へ交渉があつたやに傳聞したので、我々も實は少々運動して見たのであるが、何しろ戦争中だつたので先生も心進まず、開通祝典が濟むと間もなく歸國されたのは遺憾の至りであつた

左に其の當時の番組と先生の書翰及び開通式案内状を掲げて昔を偲ぶよすがともしやう。

拜啓倍御清榮奉賀候陳ば先般在韓中は色々御配慮に預り忝存候御蔭にて能樂も無事演了大慶の至に御座候我々一行往復共非常なる難儀いたし候得共先は無事にて歸京仕候乍憚御安心被下候不取敢御答禮迄早々

五月三十日

觀世清廉

高橋喜惣次殿

肅啓豔陽之候愈御清祥奉賀候陳ば本社鐵道速成工事豫定之通り

竣功本年一月一日より營業開始致し候に付茲に来る五月廿五日を卜し韓國京城南大門外に於て開通式を舉行致候間御貴臨被成下度御案内申出候敬具

明治三十五年五月十五日

京釜鐵道株式會社
總裁 古市公威

高橋喜惣次殿

當日式場へ御參列被下候時は此招待狀御持參被下度候

謹而申上候本月廿五日京釜鐵道會社に於て開通式を南大門驛にて舉行せらるゝに付ては觀世能樂並に太々神樂を遙々東京より招き當日の餘興に供せらるゝと申事なるが如此妙技を此京城にて僅かの時間演ぜしめ其儘歸朝せしむるは誠に遺憾の至りなれ

ばとて會社は開通式を閉ぢたる後舞臺道具一式を擧げ特に是を
京城婦人會に貸與へて冷く衆庶の觀覽に便せしめ觀覽料を慈善
事業の費用に投ぜん爲め開通式の翌日廿六日を卜し右觀世能樂
並に太々神樂を南大門驛の同所に開催すべければ本會の微意を
酌取られ此妙技觀覽の爲め袖を聯れて御來臨の程偏に冀ふにな
む

京城婦人會發起

明治三十八年五月十五日

慈善能樂會印

高橋喜惣次殿

能樂番組

山姥 田村 熊野 土蜘蛛 亂 外狂言三番

扱てかやうにして京城に於ける先生一行の演能は多大な歡
迎の裡に了つた。韓國に我が能樂を知らしめやうとしたのは
決して此の時が初めては無いが完全に此の目的を遂行し得
たのは實に此の時に在つたのである。そもく我が能樂を韓
國に知らしめやうとした最初の人は豊臣秀吉であつたらしい
其の以前にもあつたかは知らぬが何しろ餘程久しい以前から
の宿志であつたに相違ない。左に古市博士の書翰を掲げて這
間の消息を知る参考としやう。

拜讀過般拜顔の節も申上候通り小生承り及候處に據れば文祿の役豊太閤朝鮮に於て演能計畫有之肥前名護屋迄金春太夫を召し連れられしも遂に渡韓せられず其の事止みたりと則ち明治の聖代に至り京釜鐵道の開通に方り豊公の遺志茲に實行せられたりと申して宜敷かと存じ候小生當時清廉子を頼み候同子ならば其の性質として戦争中の渡韓杯は却て好む所なる可しと見込みたる次第に有之候果して相談纏り彼の世界を震動せる日本海々戦の前日に京釜鐵道の祝能を韓國京城に於て演奏するを得たるは御同様快心の事に有之候取紛れ御答延引の段御海容是祈候書外拜眉可申述候勿々敬具

十月八日

高橋喜惣次様

古市公威拜

催眠術の研究

先生は又驚く可き程器用な質で、習字なども別に誰れと云つて師匠に就いて正式に學ばれた譯でもないのであるが、其の筆蹟の美事な事は「清廉遺風」を披いて見ても直ぐ解るだらう。扱てまた我が國に始めて催眠術なるものが起つた當時、先生は逸早くも此術の研究に着手せられた。何んでも之れには随分失敗談があつたやうに聞いている。兎に角先生の眼の着け處が凡庸で無かつた事は此の一事でも知れるだらう。

稀に見るの孝子

先生は稀に見るの孝心深き人であつた。老いたる母堂に事へて盡さざるはなく、花につけ月につけ其の心を慰め、咳一つせられても若しや恙でもありはせぬかと心を遣はるゝ程であつた。のみならず先考清孝の追善回向は一度も怠つた事なく、折にふれては追想して、時に涙にさへ沈まれた事も一再ではなかつた。明治三十七年二月が清孝の十七回忌に相当したので、宗家舞臺で追善能を催し、先生は「隅田川」を勤められたが、技神に迫

つて、哀傷の氣の切なるものあるに、観客何れも袖を絞らずには居られなかつた。是れより先き觀世第二世の祖秦清次の五百一年追善能をも催された事があつて、追遠の孝心厚きに感せぬものはなかつた。

意表外の稽古始め

余が郷里上總國埴生郡八板村と云所に杉野角次郎と云ふ少年があつた。此の少年は余の亡祖父高橋喜兆翁に就いて學問し、猶ほ亡父花溪並びに千葉周作の高弟原田直義氏に従つて擊

劔を練磨した。此の少年こそ今東京に名垂るゝ清心丹本舗高木與兵衛翁だつたのである。翁は先生と別懇の間柄で余が先生の門に入つたのも翁の紹介だつたのである。一日余は翁に伴はれ當時麴町區飯田町にあつた先生の門を始めて潜つた。同日は單に束修を納め、師弟の契約を結ぶだけに止めて歸らうと其旨を翁から先生へ申込んで貰ふやう頼んで置いた。實を云ふと、翁は古い謠曲家であるから余は一二番翁の下稽古を受け、それから稽古日に出て先生の教へを仰がうと思つてゐたの

である。扱て先生は折好く在宅されてゐたので、翁は余を導き直ちに先生の居間へ通つた。暫く話しがあつて、イザお暇しやうと云ふ時、先生は、其頃まだ少年であつた橋岡久太郎を突然呼び、見臺と「鶴龜」の本を取り寄せた。而して先生は之れから余に稽古を始めるのだと云つて、余を前に坐らせ、高らかに先づ謠ひ出された。其時翁は余の座側に在つたが、此の意表に出でた出來事に余も大いに面喰つたけれども、先生が折角の志眞逆に厭ですとも云はれず、餘儀なくも口寫しのまゝ、三度四度教授され

て歸つた。之れ實に余の稽古始めて其の時のキマリの悪さ、今に翁に會ふ毎に語り合ふ一ツ話となつてゐるが、先生は總て恁う云ふ風の人であつた。其の一例にする積りで茲に記したのである。

終世の恨事

明治九年頃から屢々仰せ出された行幸啓能は、英照皇太后崩御以來一時御中止の有様となつた。恰も明治四十年六月十三日、久し振りで、行啓御能が九段能樂堂に於て行はれた。是れよ

り先き先生には英照皇太后御在世中屢々芝能樂堂に於て其の技を上覽に入れ奉り、至大の榮譽を荷はれたのであつた。さて十三日の當日は先生も「小袖會我」を上覽に供する事となつて、只管豫習に勉められたのであるが、當時既に先生の健康は太くも害はれ、身體の動作も爲めに兎角意の如くにならなかつた。先生は申すまでも一門の人々一ト方ならず之れのみ心に悩ましながらいよゝ其の日となつた。豫ねての憂慮は事實となつて遺憾！先生には「小袖會我」を勤め得ず、單に「雲雀山」の仕舞に

代へて上覽に達するの餘儀無きに至つた。之れ獨り先生のみならず吾々も以て終世の恨事とする處である。

誤解されたる先生

代々の觀世宗家のうちには學識の秀でゝゐたものもあつた。慷慨家もあつた。さては又禪理に通じてゐたものもあつた。此の外また随分種々な特質を有つてゐたものも少くなかつた。併しながら音聲の美を極めたものに至つては恐らく先生を措いて他に多く比儔を見出し得なからう。先生の妙音佳調は知

る人ぞ知る聴くものをして恍惚我を忘れ眞に之れ天來を以て魅蕩せしめたのである。されど高木は風に悪まるの譬の如く世の小人動もすれば此の美音を妬んで、謠曲には不向だなど、怪しからぬ陰口を叩いた。何と云ふ淺ましい事であらう。云ふものをして云はしめよ、先生の眞價は百万中傷の奸罵を以てするも些の毀損をだに受くる事斷じて無いのである。

先生は又非常に多忙な身であつた。それが爲め時には手紙を認めながら教授された事などもあつた。併しながら先生の

懇切熱心は夫れが爲に毫も減せられてはゐなかつた。

否寧ろ寸刻たりとも吾々に満足を與へやうと努められたのであつた。然るに先生の眞意を解し得ぬ小人の輩は密かに悪口して、「先生の教授法は甚だ冷淡且つ不親切である」と云つた。さりとは何と云ふ無禮な言ひ草であらう。

先生の教授法に就いては先生に意見があつた。「始めから六ヶしく教ゆるは害あつて益が無い。初心の人だつたら徒らに勞多くして其の割合に進歩はせぬ。若し強めて六ヶしくした

なら飽きが出て中止する虞れがある。習ふ人の力量を察し、漸次六ヶしく教へて行く方が宜いのである。」と先生は常に語られた。現に九番以上の人は先生が直接に稽古せらるゝ事は、宗家立關の揭示にも記されてゐるのである。先生の教授法を冷淡且つ不親切と罵つた輩のうちには己の力量にも副はぬ非望を懐いてゐたものもあつたに相違ない。

先生に對して放たれた悪口は要するに誤解で先生が光は依然耀々乎として輝いてゐるのである。

嗚呼、偉なる哉先生！

清廉先生の藝談

謡の儀式を遵守せよ

一ト口に謡と云つても能、囃子、仕舞、素謡、獨吟、一調、一調、一聲など、云ふやうに種別があつて、各其の謡ひ方を異にするのであるから、謡ふ人は第一に之れを知つて置かなければならぬ。

能の地謡は謡で最も重んずべきものである。能はシテ、ワキツレ等登場人物の形のあるものだから、第一其の形と能柄の好

く現はれるやうに謠ふが地謠の務めなのである。それに囃子方も揃つてゐるから拍子に就いての注意は云ふまでも無い。彼此熟考して其の能を活かす丈の働きに地謠の苦心が存するのである或説に、地謠は料理場の飯焚き普請場の土こねりと同じで好く出来たからとて褒めてくれるものも無く、僅かでも悪い時は忽ち四方八方から攻撃される、と言つたが如何にも適評である。

扱て謠は謹肅を旨とするもので、儀式は古來からの仕來りを

遵守し、苟くも之れに違はぬやうに心掛けねばならぬ。謠は心から發して聲に現はるゝものであるから、此の儀式を僉略にするやうな人は謠にも亦其僉略が現はるゝに相違ない。且つ謠は多人數集つて謠ふものであるから、一定の規律の下に立ち心を一致和合せしめねば好い謠の出来る筈は無い。最も慎しむべきは儀式遵守の事である。

謠ふ時の姿勢

謠を謠ふ時に最も必要なのは姿勢である。姿勢が悪かつた

ら立派に謠へるものではない。之れはよく／＼注意しなければならぬ。總じて體は前へ屈んでも不可ければ又後へ反つても宜くない。従つて頭も然うで仰向いても俯いても見苦しいそれから目の着けどころは坐つてゐる時には三尺向ふ立つてゐる時には六尺向ふと云ふのが法である。俗に半目と云つて上は目も使はず、塞ぎもせず、伏し目に半開なのを適度としてゐる。目を塞いで了ふと頭が固くなつて困る事があるものだが何か疑はしい事でもあると自然目を塞ぐやうになる。して見

ると目を塞ぐのは不確な事があるにも由るので洵に見つともないものである。能く云ふ事だが扇や手で拍子を取る癖程羅り易いものは無く、又之れ程醜しいものは無い。癖と云ふものは修業中の習慣であるから、稽古の際に注意する事勿論肝要であるが又一つには不確な事がある處から起つて來る事もあるのである。

寶生九郎觀世清之松本長梅若萬三郎などは先づ體の構への立派な人と云つても可からう。體の構への立派な程見好いも

のではない。

九階級の調子

謠の調子なるものは其の人の質に依る事勿論であるが、併し全然質にのみ歸する事は出来ない。即ち教へ方に依つては調子の合はない人も随分合ふやうになるものである。多数の人に徴して見るに、通常談話の聲と笑ふ時の聲と同じ調子の人には屹度謠の調子も外れない。之れに反し笑ふ時の調子が通常談話の調子と違つてゐる人だつたら兎角謠の調子も外れ勝

ちとなる。

扱て調子の稽古は先づ始めに甲に張らせ、次に呂を習はせ中間の調子を一番後に廻す事としてゐる。調子を大別して見ると上中下の三通りになるが。觀世流では更に其の各を三ツに分け都合九階級から成り立つてゐる。此九階級の調子を能く謠ひ分け得る人であつたら調子の合はないと云ふ事は無い。調子の合はないのは畢竟聲の働きが硬いので充分に捌けぬからの事である。それだから先づ始めに一番高い調子を張

り切らせ、夫れから低い呂の音を練習させ、此の二ツが出来上つた上で中間の調子へ及ぼして行くと云ふのが順序なのである。元來謠の調子は呂中甲の三階級に區別してあるが、前にも云つた通り私は之れを更に三階級に區分し、都合九階級とした。即ち、

甲の上

クリの調子で最上の高い所である。

甲の中

ハリと云ふ處の調子である。

甲の下

上と云ふ處の調子で甲の最下級である。

中の上

クリの前の振りウキの處の調子である。

中の中

張りの前のウキの處の調子である。

中の下

入りの前のウキの調子である。

呂の上

普通の下と云ふ處の調子である。

呂の中

下のウキの調子である。

呂の下

俗にクツシと云ふ處の調子で最下級の聲である。

此の外はサシのうちの中落し、下のうちの上落しと云ふ特種のものもあるが、是等は多くは習ひの節に用ゆるもので最も研

究を要するのである。

サシのうちの「中落し」と云へば、「野宮」の「物見車」の「さまぐに」と云ふ處、下の「上落し」と云へば、「通小町」の「深草」の「少將」と云ふ處などである。

下のウキと云ふ事はメラスと云ふ事で「通小町」の「招ぐ」とさら「と云ふやうな處で、之れ亦多く習ひの節である。

調子の事は、詳しい事になると口授で充分に研究しなければ解るものではない。茲にはホンの大體をお談したに過ぎない

のである。

観世流の謠ひ方

観世流は、ねばつかぬやう、さつくりと大きく、幅廣く謠ふのである。如何に器用に謠はふと、小さく、幅狭き謠ひは採るに足らない。

成る程先生の謠は如何にも大きくて幅が廣く、其の上謠に活氣即ち氣合が満ちてゐた。殊に「正尊」の起證文、「安宅」の勸進帳の如き讀物、若しくは又語物にでもなると、其の調子の高く

氣合の勝れて他と異つてゐた點は、全く先生獨歩の境地で、稽古ばかりで出来るものでないと、聽く度に嘆服の外はなかつた。

息継の要訣

息継ぎは鼻でするのであるから、呼吸を繼ぐのは宜しくない尤も胃の加減で口中に唾の溜る時は已むを得ず吸ひ込まなければならぬが、口で息をする時は、屹度呼吸が抜けるやうになる。

聲を發すにも謠ひ處によつて呼吸の工合が違ふ。呼吸と云へば御承知の通り阿伝の二ツに分れてゐる。彼の「安達原」の後の如く、如何に旅人止れとこそと出るのは阿と吐いた息で更に「隅田川」の人の親の心は闇にあらねどもと出る如きは伝と吸つた息から出さなければならぬ。

私は先年或人から頼まれて吃の人に謠を教へて見た事がある。一概に吃と云つても、之れにも亦二ツの別があつて阿と吐く息で吃ると、伝と引く息で吃るとある。故に、阿で吃る方

は伝の息で謠はせ、伝で吃る方は阿の息で謠はせると謠へるやうになる。

先輩が研究の結果遺された金言を申して御参考にしやう。即ち、

「句切りのある處の息は鼻より取り中途の口切りは口で息をせよ。」

能面と表情

名人になると、喜怒哀樂の心持が掛けてある面に現はれる

と見える。觀世の昔の太夫が「鐵輪」を勤めた時に、「いふより早く色かはり」の處で面の色が變つたと云ふ話もあるが、それにしても木で造つた面がそんな働きを何うしてするか、藝が極意に達すればそんな不思議も現はれるものかと或能面作家に訊いて見たことがある。すると其人の云ふには、一体能面でも鬼とか、天狗とか云ふやうな怒つた顔ならば、寧ろ造り易い方であるが、女の面となると非常に困難である。殊に「羽衣」に用ゆる小面の如きに至つては、至難中の至難な

るものだと云つたが、成る程夫れに相違ない。羽衣を取られた時の悲しさうな顔に造ると、後の羽衣を返して貰つて喜んだ時に不都合になるし、さうからと云つて喜んだ顔にすると前の憂ひの時に困る譯である。それならば結局何う云ふ表情の顔に製作するかと訊いて見ると、仕方が無いから、ドツチつかずの何も考へてゐない、ボンやりした顔付に造るのだと答へた。それから取り分け難しいのは眼睛の穴の明け方で、それが何か見てゐるやうでは不可い。只眼を据ゑた無心な顔

付にするのだと云つた。

此話を聞いた後で、神作とか銘作とか云ふ面を見た時好く注意すると、如何にも作の良い面ほど顔がボンやりとしてゐて、無我無心に見える。反之、少し劣つた作になると、何處かに何か意味が含まれてゐるやうで、それが爲め却つて生氣を帯んでゐるやうに思はれ、只面として飾つて置くのには却つて此方が好いやうな氣がする。

處で茲に面白い話がある。能の面と云ふものは不思議なも

ので、掛けてゐる人が泣く型をすれば、面も泣いてゐるやうに見えるし、喜べば如何にも嬉れしいやうに見るものだと聞いた人が、或時能を見に行くと、外の面は一向そんな風も見えなかつたが、シテを勤めた人だけは如何にも話に聞いた通り、物を云へば口も動くし、眼までがパチ／＼動くので、成る程是は不思議なものだと非常に感心したと云ふので、それは何であつたかと訊くと、「鉢木」とか云ふ能で、シテは佐野源左衛門とか云つたと答へた。それはその筈、ツレは面を掛

けるが、シテは直面である。

それから又面は其品に依つて大きさを異にする。「熊坂」に掛ける長靈癡見や、天狗ものに掛ける大癡見など云ふ大きな面もあれば、若女や小面など云ふ小さなものもあるが、それが誰の顔へでも間に合ふと云ふのは不思議だと云つた人がある。面ばかりで無く、人の顔にも大小あり、長廣あつて、十人十色である。それで顔の小さい方の人は格別困ることも無いが、顔の大きい人となると實際は夫れが爲に種々困ること

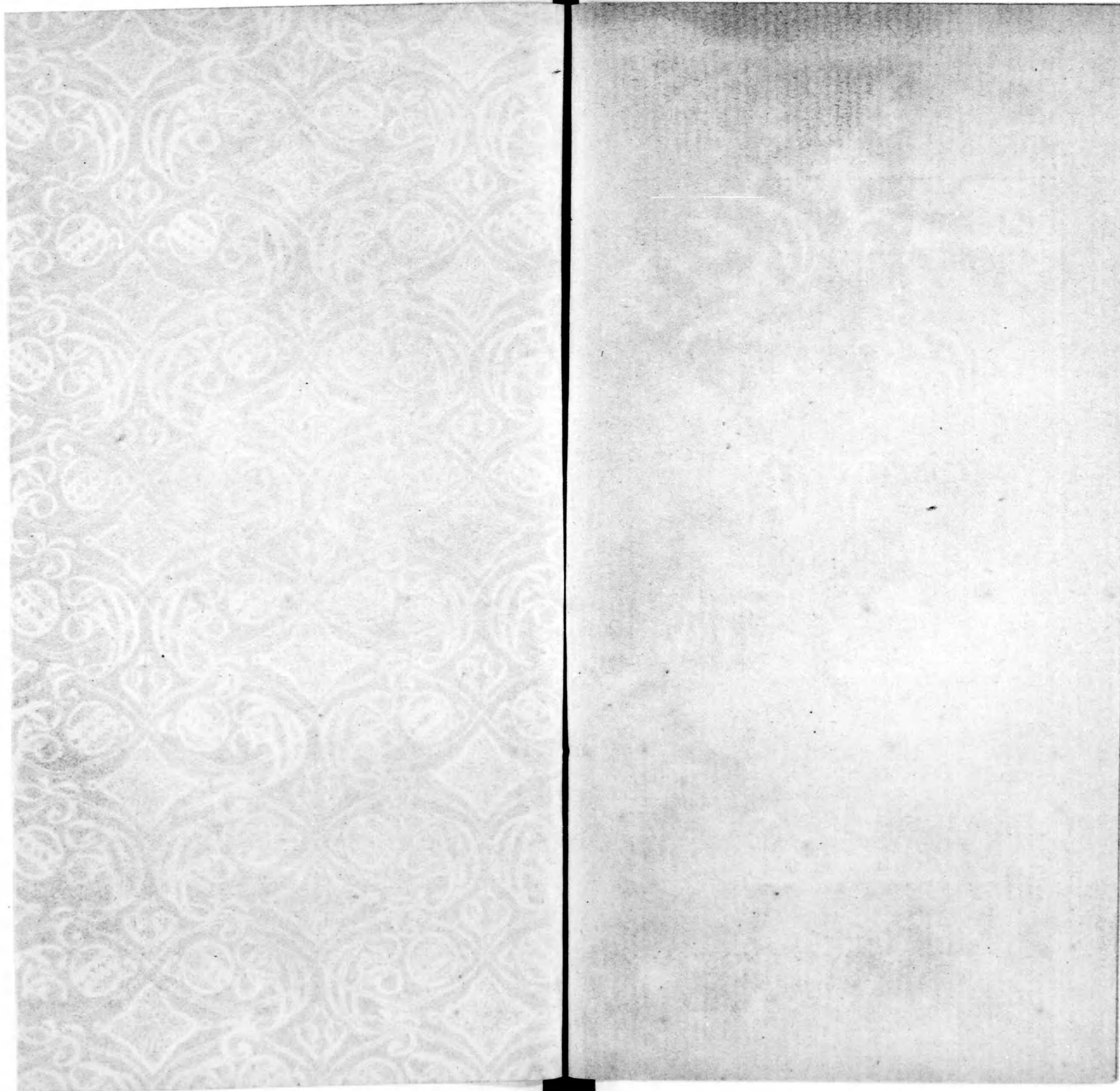
がある。清孝などは並み外れの笑顔で、小面などを掛けると
 兩の頬が面の外へハミ出る程だつたから、餘程滑稽なもので
 あつた。併し舞臺で能を勤めてゐる間はそれが少しも苦にな
 らかつたさうである。して見ると面よりも藝の力で、例へば
 尉の面を掛けると、面の耳と本物の耳と二ツ並んでゐるが實
 際目障りにならないと云つたやうに、不思議と云ふ外はない

大正元年十一月廿一日印刷
 大正元年十二月十日發行

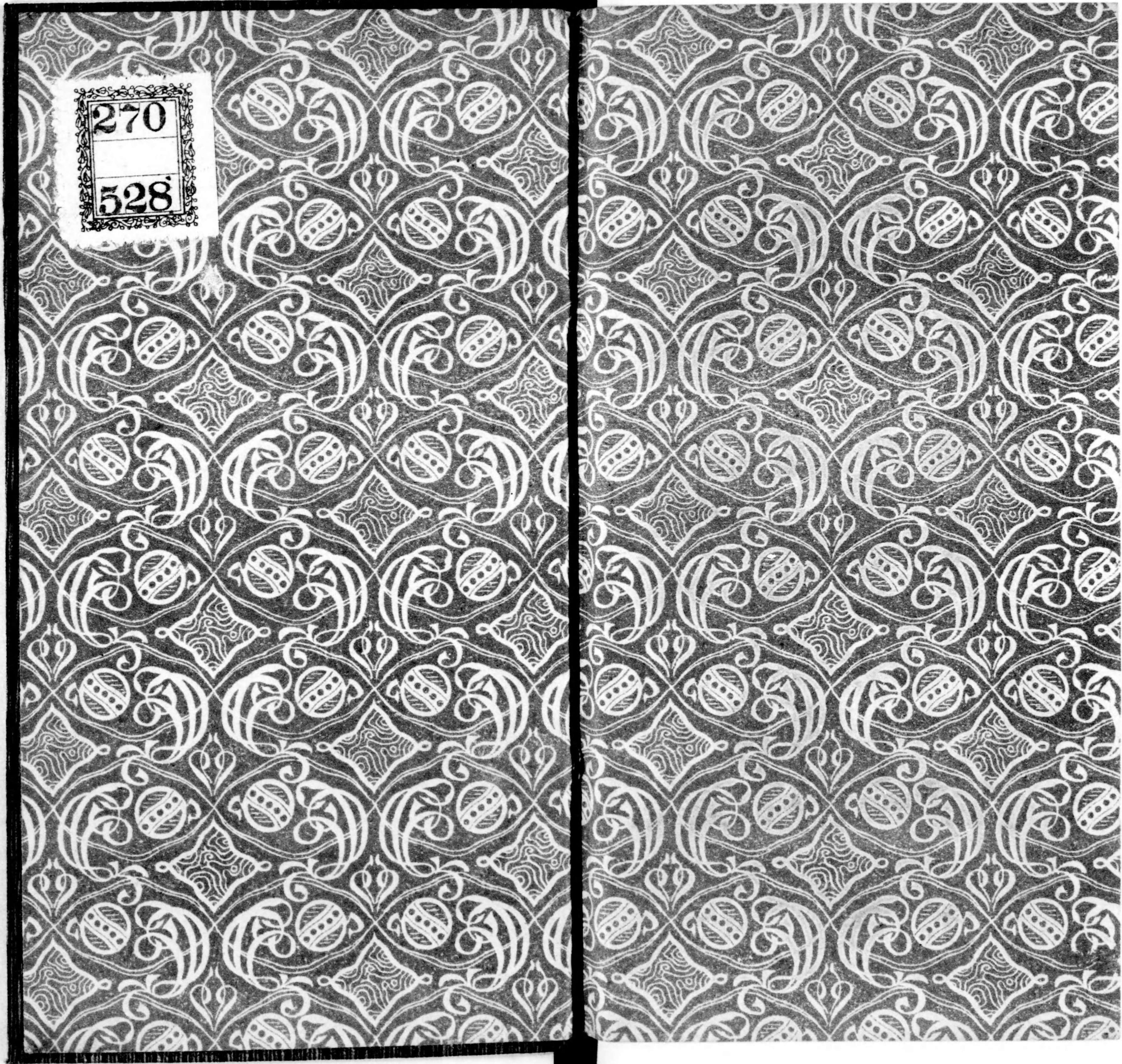
不許複製

發行所

著者 高橋喜惣治 横濱市四戸部町百三十番地
 發行者 東京市日本橋通四丁目八番地 江島伊兵衛
 印刷者 東京市京橋區新富町一丁目六番地 笈田吉松
 東京市日本橋區通四丁目
 じんや江島書房
 電話本局一一七四番
 振替東京四一六三番



270
528



終

